

教育者としての渡邊輝道先生

渡邊輝道先生は、昭和五十四年四月高知大学人文学部にご着任以来、二十二年の長きにわたって、高知大学国語文学会にご尽力下さいました。特に昭和五十九年以降は学会の会長職を務められ、学会の維持、発展にご貢献いただいたことは、特筆に価すると言えます。

私は先生がご退官なさる前の二年間を後輩教官としてご一緒させていただきましたのですが、先生の国語国文学会に寄せる情熱の深さをたびたび実感する機会がありました。話題が学会のことになると、先生の目は少年のように輝き、笑顔がこぼれるのです。人文学部長という激務をこなされていた先生にとって、学会の存在は清涼剤のような役割を果たしていたのかと思います。先生のお話によれば、半世紀の歴史をもつ国語国文学会も、先生ご着任のころは卒業生の参加も現在よりずっと少なかったそうで、どうしたら学会への参加者が増えるか日々思いをめぐらせ、講演者の依頼などにもずいぶん工夫をなされたとのことでした。

さて、昨今大学では授業改革が叫ばれております。どのような授業が大学教育としてふさわしいかその答えは一樣ではありませんが、学生が毎回出席したくなるような授業、次の年もまたその先生の授業を登録したくなるような授業の望まれていることは確かなことです。渡邊先生はその点、理想的な授業実践をなさってこられたように思われます。というのも、学生たちの先生の授業に対する評価には極めて高いものがあります。私には学生からどの先生の授業が面白いか聞き出そうとする悪い癖があるのですが、彼等の情報を総合しますと、学識の深さと話術の巧みさ、学生をあきさせない授業展開の名人ということになるかと思えます。一部の学生たちはひ

そかに渡邊先生に愛称をつけ呼び合つてさえいました。また、つい先日もある学生から、「渡邊先生の授業をとりたいたのですが」という相談を受けています。渡邊先生は現在、放送大学高知学習センター所長でいらつしやいますが、その学生は、放送大学での受講を考えているとのことでした。

ほんの二つ三つのエピソードで恐縮でしたが、それだけでも、高知大学そして高知大学国語国文学会にとって渡邊先生の存在がどれほど大きかったかが察せられるのではないのでしょうか。先生の益々のご健勝とご発展を祈念いたします。

鈴木 健司